

ひなり、おなじくは御前にてあらそはるべし、負けたらん人は、供御をまふけらるべしとさだめて、御前にめしあはせられたりけるに、具氏おさなくよりき、ならひ侍れど、其心しらぬこと侍り、馬のきつりやう、きつにのをか、中くばれ、いりくれんどうと、申す事は、いかなる心にか侍らん承らんと申されけるに、大納言入道はたとつまりて、是はそゞろごとなれば、いふにもたらずといはれけるを、もとよりふかき道はしり侍らず、そゞろごとをたづね奉らんと、さだめ申しつと申されければ、大納言入道まけになりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

〔三養雜記〕なぞく

徒然草に、註釋の書も多かれど、この馬のきつのなぞくを解たるものなし、南畝翁の筆記に、眞字徒然草に、馬之吉了、狐之尾之中、凹入衢連動とかきて、吉了を秦吉了といへるはいかゝあるべき、南郭の大東世語には、馬吃糧、狐丘凹入九連等とかき、保己一檢校は、馬吉駿、狐丘凹入九連倒なり、山海經に、犬封國に文馬あり、縞身朱鬣、名づけて吉駿といふ、駿馬も、狐の丘につまづきてぐれんだうと倒る、ことありと云いましめなりとかやとあり、これにて謎の字面はしるる、ものから、その意までの解に及ばず、閑田耕筆に解たるを併て明解といふべし、柏原瓦全が記せるものに見えたるよし、略 中かくいへば、いとむつかしく聞ゆれども、今童兒の常のたはぶれにいふなぞく^〱に、これと全おもむきの似たるは、厠のわきにて、狐こんと啼、それは空言よ、み、のなきみ、づくがもんどりをうつ、これ馬のきつと同例にて、空言よにて、これまでをばぶくなり、み、のなきみ、づくは、み、がなければ、づくの二文字ばかり存るを、もんどりをうつといふにて、倒置すれば、厠といふ謎となれるなり、

〔閑田耕筆〕^四謎語といふもの、やまともろこしも、古へより聞ゆ、絶妙好辭を謎字にせるがごとし、こゝに、柏原の瓦全記せるもの有、をかしければあぐ、